

## 大学授業の改善と遠隔授業システムの有効利用のための 副読本とディベートを導入した授業の提案・実践と評価

守 一雄・野口宗雄・天岩静子・川島一夫  
小松伸一・高橋知音・中西公一郎・今田里佳

キーワード 大学授業 授業改善 授業評価 読書教育 ディベート 遠隔授業

### はじめに

本研究は、1999年度の信州大学の「SUNS,SCSによるマルチスクリーンとコンピュータネットワークを併用した遠隔講義システムに関する研究」プロジェクトの一環として行われたものである。しかし、本研究はSUNS（信州大学画像情報ネットワーク）を活用した授業実践ではあるが、SCS（スペースコラボレーションシステム：通信衛星を使った全国規模での遠隔授業システム）もマルチスクリーンも使ってはいない。コンピュータネットワークの活用もほんのわずかである。

信州大学は県内にキャンパスが分散しているため、遠隔地のキャンパスでの授業のためには、教官（または学生）が片道2時間近くをかけて移動する必要がある。各キャンパス間を電子的に結ぶSUNSはこうした不便を解消するために導入されたものであった。SCSは通信衛星を使って、全国規模での遠隔講義を可能にしたものである。しかし、実はSUNSによる遠隔講義システムは現実にはあまり利用されていない。

なぜSUNSを利用した授業があまり行われぬのか。その理由は「教育効果が上がらない」とか「機器操作が難しい」といった誤解によると考えられる。こうした誤解を解消するためには、既存のSUNSよりもさらに高度なシステムである（と思われている）SCSやコンピュータネットワークを活用した研究例よりも、誰にでも使えるような「日常の知恵」を活用した実践例を示すことの方が効果的であると思われる。

本研究では、従来の授業形式とSUNSを利用した授業とを半分ずつ使い、しかもSUNSは学生の活動が中心となる授業回にのみ用いるというやり方によって、特に難しい使い方をしなくても通常の授業にSUNSが利用できることを実践例で示した。この実践例では、いろいろな授業の工夫もなされたが、これらは従来から用いられていた授業の工夫であり、学生にも講師側にも実施のための特別な技能が必要とされないため、実施が容易であるという利点がある。本稿がSUNS利用の拡大に役立てば幸いである。

### 1. 研究の目的

#### (1)信州大学画像情報ネットワーク（SUNS）の授業への活用

我々の研究グループは信州大学にSUNSが導入されて以来、最も積極的にSUNSを活用してきた教官集団である。教育学部には百名余りの教官がいるが、SUNSを定期的に授業に活用している教官は我々を含めても10名に満たない。SCSやマルチスクリーン、コンピ

ュータネットワークを含めたすべてのシステムを活用した授業を行っているのはたった1名である。

信州大学は本部が松本市にあるが、8つの学部のうち教育学部など4学部が長野市など県内に分散していて、いわゆる「タコ足大学」である。そうした中で、総合大学としての利点を考慮して、1年次生だけは全学部が松本で共通教育（かつての教養部にほぼ相当する）を全学部教官が授業を分担する形で行っている。教育学部は長野市にあるため、松本キャンパスで1年目を過ごす教育学部1年次生に対する授業は教官が松本まで出かけて行く必要がある。長野松本間は約70km、片道2時間はかかる。各キャンパス間を電子的に結ぶSUNSはこうした不便を解消するために導入されたものであった。しかし、SUNSによる遠隔講義システムは現実にはあまり利用されていない。

なぜSUNSを利用した授業があまり行われぬのか。教育学部の教官にその理由を尋ねれば、おそらく「遠隔講義では教育効果が上がらない」という答えが返ってくるであろう。しかし、本当に教育効果が上がらないのかを試してみたわけではない。実は、SUNSの導入後に行われた遠隔講義の教育効果を教育心理学的に比較した実証研究（守・大藪・野村・大下，1992）では、SUNSを用いた授業でも十分に教育効果があることが確認されているのである。むしろ、SUNSがなかなか使われぬ理由は「教育効果が上がらない」とか「機器操作が難しい」といった誤解によると考えられるのである。

さらには、「授業にSUNSを利用する」ということへの誤解もある。インターネットの急速な普及は、地球規模で遠方の人間同士のコミュニケーションを拡大させた。しかし、だからといって、直に会って話をする機会が減ったわけではない。インターネットが登場する前の技術として普段誰もが当たり前のように使っている電話にしてもそうである。わざわざ出かけて行かなくても電話をかければすむからといって、電話の普及後に人々の移動が減ったわけでもない。電話やインターネットが普及しても、電話やインターネット「だけ」を使うようになるわけではなく、それぞれに適した使い方がなされるようになるからである。

同じことはSUNSに関しても言える。しかし、ややもすると「SUNSを利用した授業」というと「授業のすべてをSUNSを利用して行う」と考えられがちである。そして、「従来通りの授業」と「すべてをSUNS利用で行う授業」とが比較されてしまう。商談を面談で行うのと「すべての商談を電話で行う」のを比較すれば、「電話での商談」の効果は実際に会って面談することに及ばないのは当然である。しかし、だからといって、商談にまったく電話を使わないのがいいということにはならない。

本研究では、従来の授業形式とSUNSを利用した授業とを半分ずつ使い、しかもSUNSは学生の活動が中心となる授業回にのみ用いるというやり方によって、特に難しい使い方をしなくても通常の授業にSUNSが利用できることを実践例で示すことを第一の目的とした。

## (2)大学の授業方法の改善

守らは、大学教育における授業方法の改善のため、学生による授業評価を含む一連の研究を行ってきた（守，1995；守・野口・筒井・川島・小松，1996；守・小林・川島・東原・小松・高橋，1997；守・小林・川島・東原・小松・高橋・柴田，1997）。また、浅野（1994）や赤堀（1997）などの他、アメリカでの実践例の翻訳書も多数出版されている（たとえば、

ディヴィス・ウッド・ウィルソン, 1983/1995; スタンバーグ, 1997/2000など)。こうした本では、シラバスの提示、学生とのインタラクションの重視、頻繁な小テストの導入などがアメリカの大学教育をモデルにして推奨されているが、このようなアメリカの大学教育における種々の工夫は、結局のところ、日本の小中学校における授業方法についてのノウハウと基本的に同じである。守(1994)は「何も北米の大学の真似をしなくても、日本の小中学校でやられているようにやればよい」と主張している。

現代の大学教育では、学習者自らが①問題点を見つけだし、②関連する情報を収集するとともに、③問題の解決方法について討議し、④解決策の実現のための行動プランを作るといった、積極的な問題解決技法の習得が必要とされる。こうした技法は、結局のところ「読み・書き・聴き・話す」の4技能を統合して用いる能力である。

これはよく批判の対象とされる「講師が壇上から一方的に講義ノートを読み上げる」という大学のやや誇張された授業スタイルが「聴く」ことだけを学生に要求することと好対照である。もっとも、これもまた真偽が確かめられないまま流布している言説であるが、「昔の大学生は、もっとたくさん本を読み、議論し合った」そうであり、講義で聴いたことをしっかりとノートに書いたであろうから、昔はそうした講義スタイルでも学生は4技能を自主的に活用していたのかもしれない。

それでも大学の授業において、教授する側が意図的にこれらの4つの技能を盛り込むことは有益であるにちがいない。そして、それはそんなに難しいことではない。課題図書を決めたり、レポート提出させたり、授業時間内に学生同士での議論ができる場を設定したりすればいいのである。具体的には、以下の4点を取り入れた授業を実施する。

a) 課題図書の活用：「読み」技能のために、課題図書を課し、「書き」技能のために、読後レポートを提出させる。

b) ディベートの活用：小グループによるディベートを行うことにより、意見を論理的に「話す」技能と、相手側の意見をしっかりと「聴く」技能が必要とされるようにする。

c) 情報収集技能の活用：従来、個々に教育されてきたインターネットの活用技術、図書館の活用技術などをディベートのための資料収集に実際に活用させる。

d) レポートの添削：受講生から提出されたレポートは講義者が添削し、コメントを書いて返却する。このことにより、講義者と受講生の間にも書面による討論がなされる。電子メールアドレスと活用技能の獲得後はレポート提出を電子メールによって行う。

こうした副読本とディベートを取り入れた新しい授業形式を紹介することが本研究の第2の目的である。

## 2. 大学の授業方法の改善と SUNS の利用を統合した新しい授業形式の提案

### (1) 授業に SUNS を利用することの難点と SUNS に適した授業形態

守らは、信州大学画像情報ネットワーク(SUNS)の導入以来、その利用方法の開発や教育効果の評価研究も続けてきている(丹野, 1990; 守ら, 1992)。そうした研究から得られた知見を実践にも移してきて、1991年度から一般市民を対象にした公開講座(守ほか, 1991~1998年度)や中学生や高校生を対象にした公開講座(守ほか, 1999~2000年度)にもSUNSを活用してきている。そして、1994年度からは、「新入生ゼミナール」の授業を

SUNS 利用によって開始した。

SUNS を利用することの最大の利点は、長野松本間の移動時間の問題が解決することである。一方、伝達できる情報の絶対量は著しく減少するという難点がある。SUNS は通常のテレビ放送と違って、双方向通信なので、学生からの質問も可能である。しかし、情報量の少なさのために、講師側からの情報伝達だけでなく、学生からのフィードバック情報も通常の授業のようにはいかない。たとえば、通常の授業では受講学生の表情やしぐさから講師側の情報が伝わっているかどうかが無意識的にフィードバックされてきている。ところが、SUNS 利用の講義ではこうした情報はほとんど伝わってこない。黒板などに板書する場合にも、テレビ画面に映すことができる範囲は数分の1に狭められてしまう。その結果、通常の講義スタイルの授業を行うとすれば、どうしても教育効果は通常の授業にかなわないということになる。体育や音楽・美術などの実技指導や理系の分野における実験など、そもそも SUNS 利用がほとんど無理なものもある。

しかし、SUNS のもつ難点を十分考慮したうえで、その利点を最大限に活かす活用方法がないわけではない。講師側と学生側とで情報伝達がそれほど頻繁に行われる必要がない授業形態ならば、伝達情報量の少なさはそれほど問題とならない。講義を「聴く」ということだけに重点が置かれていた従来の大学授業に、言語の本来の機能である「読み・書き・聴き・話す」の4技能をすべて活用する演習・実習を取り入れることを目的に考案された、副読本とディベートを取り入れた授業形式は、まさに SUNS の難点をクリアできる授業形式でもある。学生同士のディスカッションやディベートが中心となる週には、教官が実際に出向かなくとも特に問題はないと思われるからである。

## (2) 具体的授業計画案

本研究において実践された授業は教育学部教育カウンセリング課程1年次生を対象にした「心理臨床ゼミナール（新入生ゼミナール）」（前期金曜日4コマ目）と「総合演習」（後期金曜日4コマ目）であった。このうち、「心理臨床ゼミナール」の授業シラバスを表-1に示す。（後期の「総合演習」もほぼ同じ形式であった。）このシラバスは毎年度学生に配布される『共通教育履修案内』に掲載されたものと同じものである。

授業の狙い・概要等はシラバスに記載の通りであるが、いくつか補足説明を加えておきたい。

- ①受講生について：これら授業は教育カウンセリング課程心理臨床専攻生20名の必修科目であり、この年度を受講生は心理臨床専攻生20名（男子3名女子17名）だけであった。
- ②授業の第1回目だけは、学生が長野キャンパスまで移動し生の講義を受講することになっている。これは、例年この授業の開始日の夕方に心理臨床専攻教官と学生全員による新入生歓迎会があり、1年次生は長野市内の宿泊施設に1泊して翌日松本に戻るという「新入生合宿研修」も兼ねているからである。本研究との関わりで言えば、受講者自身が松本長野間を往復することにより、そうした移動の問題を解決できる SUNS 利用の利点について実体験するという意味がある。講師側だけが移動するのでは、移動の問題点は学生にはわかりにくいと思われるからである。
- ③ディベートのやり方について：近年、中学校や高等学校でも授業にディベートを取り入れるところが増えてきたため、受講生の中にはディベートをすでに体験している者もいるが、そ

表-1「心理臨床ゼミナール」授業シラバス（1999年度前期実施分）

---

### 1. 授業の狙い

大学での勉強の仕方について学ぶとともに、心理臨床専攻の基礎となる心理学という学問の学び方を学ぶ。

### 2. 授業の概要

授業は、教育学部心理臨床専攻担当教官全員が交代で行う。講義は、2週間ずつ7つのトピックに分けて行う。奇数週には担当教官の講義と説明があり、受講学生に課題図書が示される。学生は、翌週までに課題図書を読んで読後レポートを書いてくる。

偶数週の授業では、課題図書に関して教官を交えた討議が行われる。なお、偶数週の授業は、信州大学画像情報ネットワーク（SUNS）を用いて遠隔講義の形式で行う。このようにして、受講学生は大学での勉強方法と心理学の基礎に関わる7つのトピックについて、「読み・聴き・書き・話す」という4つの技能を通して学ぶことになる。

### 3. 成績評価の方法

読後レポートの内容・討議の発言・出席点などを加味して総合的に評価を行う。

### 4. 履修上の注意

第1回目(4/16)の授業は、長野キャンパスで行うので注意すること。(4/9のガイダンスで詳しい連絡をする。)

### 5. 授業計画

- 4/16 長野（守） 講義 単位認定の仕組み
- 4/23 SUNS（守） 読後レポート(1)とディベート
- 4/30 松本（小松） 講義 レポートの書き方
- 5/ 7 SUNS（小松） 読後レポート(2)とディベート
- 5/14 松本（川島） 講義 パソコンのすすめ
- 5/21 SUNS（川島） 読後レポート(3)とディベート
- 6/ 4 松本（高橋） 講義 大学生の勉強法
- 6/11 SUNS（高橋） 読後レポート(4)とディベート
- 6/18 松本（野口） 講義 ゼミでの学び方
- 6/25 SUNS（野口） 読後レポート(5)とディベート
- 7/ 2 松本（天岩） 講義 集中力をつける
- 7/ 9 SUNS（天岩） 読後レポート(6)とディベート
- 7/16 松本（守） 講義 読書のすすめ
- 7/23 SUNS（守） 読後レポート(7)とディベート

### 6. 課題図書

- (1)岡本明人『授業ディベート入門』明治図書
  - (2)木下是雄『理科系の作文技術』中公新書
  - (3)村井純『インターネット』岩波新書
  - (4)国分康孝『カウンセリング心理学入門』PHP 新書
  - (5)（プリントを配布します。)
  - (6)山下富美代『集中力』講談社現代新書
  - (7)日垣隆『学問のヒント』講談社現代新書
-

れでもディベートについてまったく知らないという受講者が大半を占める。そこで、まず最初の課題図書によって「ディベートとは何か」についてあらかじめ学習しておくことが必要となる。岡本（1986）は分量も手頃で、記述も明快であり、ディベートの導入のための課題図書として最適である。

④成績評価の方法について：シラバスには「読後レポートの内容・討議の発言・出席点などを加味して総合的に評価を行う。」と曖昧にしか書かれていないが、成績評価は学生自身による「自己評価」とした。具体的には「すべての読後レポートを提出し、ディベートに5回以上出席した学生には単位を認定することにし、評語の『優良可』を学生自身に自己評価させた。」（「資料1」参照）

⑤コンピュータネットワークの利用について：シラバスは、心理臨床専攻のウェブサーバ上にも掲載し、授業担当者の変更や課題図書の変更を適宜掲載した。（URLは、<http://zenkoji.shinshu-u.ac.jp/mori/profile/syllabus/newsemi99.html>）また、後期の「総合演習」に関しては、学生の電子メール利用が可能となっていたため、メールによるレポート提出や添削（返却）、種々の連絡も行った。

### 3. 新しい授業形式の学生による評価

大学の授業方法の改善とSUNSの有効利用とを目的にした新しい授業形式による授業の実践を行ったわけであるが、こうした授業形式による授業が目的通りの効果を上げているかについての評価もなされねばならない。1994年にこの授業形式による新入生セミナーを開始して以来、[資料1]に示すような「自己評価票」に自由記述欄を設け、学生の感想・批判などをフィードバックさせてきている。こうした学生からのフィードバックから判断するかぎり、この授業形式は目的通りの効果を上げていると考えられる。

それでも「採点対象外」とは明記してあるものの、成績を評価される立場にある受講学生は弱い立場にあり、成績評価票には率直な意見が書けない可能性もある。そこで、今回のプロジェクトでは、成績判定後に改めて受講学生による授業評価を行うことにした。

受講学生による授業評価は、当該学生が2年次に進学後の後期（2000年10月）に実施した。授業評価の時期を直後ではなく、終了半年後に行った理由は、比較対照となる授業履修経験を考慮したからでもある。1年次生にとって、教育学部教官による授業は当該授業の他には「教育参加」「野外体験」などの限られたものしかなく、しかもどちらも通常の授業形態をとらない特殊な授業である。また、1年次生は松本キャンパスと長野キャンパス間の移動経験も少なく、SUNSの有効性についての評価が難しいと考えられる。そこで、2年次に進学後、前期に教育学部の種々の専門科目を受講後の後期の開始時に当該授業の授業評価アンケートを実施した。

授業評価アンケートの質問項目は、先行研究（守ら、1992）と同じものを用いた。ただし、先行研究で評価対象とされた授業と今回の授業との違いから該当しない質問項目を削除し、一部表現を書き改めた。アンケートは基本的に2つの部分からなり、SUNSを利用した授業そのものの評価に関する20項目（5段階評定）と今回用いられた種々の工夫に関する評価10項目の計30項目であった。質問項目の実際と、それぞれの質問項目ごとの回答結果を表1-2に示した。

表一 授業評価アンケートの結果

|   |             |
|---|-------------|
| 1. SUNS 授業の評価 (5段階評価を「真ん中を0として、SUNS利用の肯定的な評価が正の値となる」よう変換し、全回答を平均した結果を示した。( )内は標準偏差) |             |
| 1.SUNSを使った授業は生の授業に比べ分かりにくい。   | 0.00(1.03)  |
| 2.SUNSを使った授業では講義の雰囲気伝わってこなかった。  | -0.20(1.01) |
| 3.教官に機器使用の不慣れさがみられ、授業に影響した。   | 0.50(1.05)  |
| 4.SUNSの授業では教室に教官の目が行き届かないため、私語が目立ち、授業に集中できなかった。                                     | 0.45(1.28)  |
| 5.SUNSの授業では教室に教官がいないので、どうしても緊張感がなく、授業に集中できなかった。                                     | 0.35(1.09)  |
| 6.教室に教官がいないため、疎外感を感じた。  | 1.25(0.85)  |
| 7.教室に教官がいないため、スキンシップが感じられなかった。  | 0.50(1.15)  |
| 8.教室に教官がいないため、教官に親しみがわかなかった。  | 0.70(1.08)  |
| 9.SUNSの授業の時は、やはり、生の授業に比べ質問しにくい。   | 0.40(1.50)  |
| 10.教室に教官がいないため、リラックスして授業を受講できた。   | 0.55(1.05)  |
| 11.いろいろ問題もあるが、SUNSの授業は先進的な感じがして良い。  | 0.10(1.17)  |
| 12.SUNSの授業は時間的・経済的なメリットがあり、他の授業でも積極的に活用すべきである。                                      | 0.20(1.11)  |
| 13.SUNSは総合的にみて満足のいくものである。   | 0.45(0.89)  |
| 14.全体的にみて画面が見にくく感じた。  | -0.50(1.10) |
| 15.送られてくる講師の声が不明瞭で聞き取りにくかった。  | 0.75(0.97)  |
| 16.できれば、SUNSの授業はあまり受講したくない。   | 0.70(0.86)  |
| 17.長野まで出かけて授業を受けるよりは、SUNSの授業の方がよい。  | 1.55(0.94)  |
| 18.教官の負担を考えると、今回のように、生の授業とSUNSの授業を組み合わせた授業でもよい。                                     | 1.50(0.83)  |
| 19.SUNSでもなんら問題がないので、全部の授業がSUNSでもよい。   | -0.90(1.02) |
| 20.こうした形式の授業を来年度以降も続けてほしい。  | 0.55(0.94)  |
| 2. 授業の工夫の有効性 (複数回答: 選択した受講生の割合を百分率で示した。)  |             |
| 1.心理臨床専攻生だけの特別の授業とし、仲間意識を深める。   | 80.0%       |
| 2.専攻の担当教官全員が2回ずつ担当する。   | 65.0%       |
| 3.副読本を指定し、2週間ごとに読後レポートを提出させる。   | 65.0%       |
| 4.提出されたレポートにはコメントつけて原則として翌週に返却する。   | 55.0%       |
| 5.副読本に沿ったテーマでディベートを行う。  | 60.0%       |
| 6.講義は生で、ディベートはSUNSでと授業内容に適したシステムの活用をする。   | 40.0%       |
| 7.必要な資料プリントはあらかじめ郵送しておいて配布し画面で見にくい文字を読む必要がないようにする。                                  | 25.0%       |
| 8.松本地区にも講師の補助者を置き、便宜をはかる。   | 50.0%       |
| 9.授業計画(シラバス)をホームページ上にも用意して変更などを迅速に伝える。  | 5.0%        |
| 10.情報提供や学生からの質問やレポート提出に電子メールを活用する。  | 15.0%       |

5段階評価による回答を「真ん中を0として、SUNS利用の肯定的な評価が正の値となる」よう変換し、項目ごとに全回答を平均した結果を計算したところ、否定的な評価(マイナス値)となった項目は、20項目中3項目に過ぎず、なかでも-0.5以下になったものは2項目だけだった。それらは、「(14)画面が見にくい(-0.50)」と「(19)全部の授業がSUNSで

もよい(-0.90)」という項目である。逆に、高い評価となった項目は、「(17)長野まで出かけて授業を受けるよりはSUNSの授業の方がよい(1.55)」というものと、「(18)生の授業とSUNS授業を組み合わせたものでもよい(1.50)」(6)教室に教官がいないため、疎外感を感じた(1.25)(逆転項目なので、「疎外感を感じなかった」ということ)」というものであった。これらの回答をまとめるならば、「移動のことを考えると授業の一部をSUNSの授業にしても良い。別に疎外感もない。しかし、全部がSUNSでは画面が見にくいこともあり好ましくない。」ということになる。

授業の工夫に関しては、「1.この授業を心理臨床専攻生だけの授業としたこと」「2.専攻教官が2回ずつ担当したこと」「3.副読本と読後レポートの組み合わせ」「4.レポートにコメントを付けて翌週に返却すること」「5.副読本に沿ったテーマでディベートを行うこと」などこの授業の特徴とされたことがらが多く多くの受講生から有効であると評価された。本研究の一番のポイントであった「6.講義は生で、ディベートはSUNSでと授業内容に適したシステムの活用をする」という項目は半数弱の受講生が有効であると回答したにとどまった。ウェブページや電子メールの利用も一部の学生だけが有効と考えただけだった。しかし、以上のことから、全体としてはこの授業形式の有効性は確認できたと考えて良いであろう。

#### 4. 研究計画と結果のまとめ

##### (1)新しい形式の授業の実践

生授業とSUNS授業を活用して、課題図書とディベートを取り入れた「心理臨床ゼミナール(新入生ゼミナール)」と「総合演習」の授業を実践した。これらの授業は1999年度から教育学部に新たに設置された教育カウンセリング課程心理臨床専攻学生20名(男子3名・女子17名)を対象としたものであった。

##### (2)授業の公開

当初の研究計画では、授業を公開し、学部内外の関係者に参観させ、問題点の討議を行う予定であったが、1999年度については授業の公開は行わなかった。(ただし、この授業は毎年同様の形式で行われており、いつでも公開する用意がある。)

##### (3)授業の受講学生による評価

受講学生による授業評価を、当該学生が2年次に進学後の後期に実施した。授業評価アンケートの質問項目は、先行研究(守ら, 1992)と同じものを用いた。アンケートは基本的に2つの部分からなり、SUNSを利用した授業そのものの評価に関する20項目(5段階評定)と今回用いられた種々の工夫に関する評価10項目の計30項目であった。授業評価の結果は、ここで提案され実践された新しい形式の授業方法が目的通りの効果を上げたことを示すものであった。

##### (4)授業のビデオ撮影・シラバス・授業マニュアルの作成

授業のビデオ撮影は1999年度は行わなかった。シラバス(表-1)は作成したが、「授業マニュアル」に相当するノウハウは担当教官各自に蓄積されていたため、簡単な「申し送りフ

ファイル」を作成しただけで授業を行った。

#### (5)授業モデルの完成とマニュアルの作成

ここで紹介した「心理臨床ゼミナール」と「総合演習」は1994年以来7年間の実施実績があり、こうした形式による授業は授業モデルとして完成していると考えてよいと思われる。「授業マニュアル」はいずれ作成する計画であるが、まだ完全な文書化には至っていない。それでも、本稿に紹介した情報だけでも、同様の授業を実践することは十分可能なはずである。

## 5. 文 献

- 赤堀侃司 (1997) 『ケースブック大学授業の技法』有斐閣
- 浅野 誠 (1994) 『大学の授業を変える16章』大月書店
- ディヴィス, B.G., ウッド, L.・ウィルソン, R. (1983) 『授業をどうする! : カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』(香取草之助監訳, 東海大学出版会, 1995)
- 守 一雄 (1994) 「新しい授業の試み: 副読本による教育心理学」『季刊窓』19 102-105.
- 守 一雄 (1995) 「大学における良い授業とはどのようなものか: 受講学生による授業評価の試行」『信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要』第3号, 65-74.
- 守 一雄・小林輝行・川島一夫・東原義訓・小松伸一・高橋知音 (1997) 「教育学部生による学部授業の評価: 「印象に残る授業」「役に立つ授業」の自由記述回答の分析」『信州大学教育学部紀要』第90号61-70.
- 守 一雄・小林輝行・川島一夫・東原義訓・小松伸一・高橋知音・柴田泰之 (1997) 「教育学部卒業生小中学校教員による学部授業の評価 (第1報)」『信州大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第5号1-10.
- 守 一雄・野口宗雄・筒井健雄・川島一夫・小松伸一 (1996) 『学生の授業評価による望ましい大学授業の特質の解明』(平成7年度大学改革推進等経費実施報告書) 信州大学教育学部 (『信州大学教育学部紀要』第88号95-106, 第89号65-73にも収録)
- 守 一雄・大藪泰・野村彰夫・大下真二郎 (1992) : 「画像情報ネットワークシステムを用いた学部間遠隔講義の評価」『電子情報通信学会論文誌』A Vol.J75-A(2) 244-255.
- 岡本明人 (1986) 『授業ディベート入門』明治図書
- スタンバーグ, R.J. (1997) 『アメリカの心理学者心理学教育を語る』(宮元博章・道田泰司訳, 北大路書房, 2000)
- 丹野頼元 (1990) : 『マイクロ波画像情報ネットワークシステムを利用した遠隔授業による高等教育の研究』(平成元年度科学研究費補助金, 総合研究A成果報告)

### 【謝辞】

本研究は、1999年度の信州大学の「SUNS,SCS によるマルチスクリーンとコンピュータネットワークを併用した遠隔講義システムに関する研究」プロジェクトのための教育改善推進費の補助を受けて実施された。ここに記して感謝の意を表す。

【資料1】「自己評価票」(カッコ内には受講生が各自で数値を記入した。ここでは、受講生20名の回答の平均値を示してある。)

1. 以下の基準を考慮に入れて、今年度の「心理臨床ゼミナール」における自分の成績を110点満点で自己採点しなさい。ただし、③④⑤⑥は、5点刻みで、0点・5点・10点のどれかを記入すること。  
(優=110-95：良=90-80：可=75-70)

- ①読後レポート：1つ 5点 レポート提出数 ( 7.0 )x 5 = ( 35.0 /35)  
(ただし、すべてのレポート提出がなされていない学生の成績は保証しません。)
- ②ディベート出席点：1回 5点 出席数 ( 6.55 )x 5 = ( 32.75 /35)  
(ただし、ディベート出席5回未満の学生の成績は保証しません。)
- ③講義内容の理解について(以下の例を参考に0か5か10) ---- ( 5.75 /10)  
10：熱心に講義を聞き、よく理解した。本当に自分は良くやったと思う。  
5：熱心に講義を聞き、よく理解もできた。  
0：あまりまじめに聞かず、内容も良く理解できなかった。
- ④副読本の読み方について(以下の例を参考に0か5か10) ---- ( 5.0 /10)  
10：熱心に本を読み、よく理解した。本当に自分は良くやったと思う。  
5：熱心に本を読み、よく理解もできた。  
0：あまりまじめに読まず、内容も良く理解できなかった。
- ⑤ディベートでの発言について(0か5か10) ----- ( 7.0 /10)  
10：熱心に参加し、他人とは違う独自の意見が言えた。  
5：熱心に参加したが、意見は他人と同じ様なものだけだった。  
0：あまりまじめに参加せず、意見もあまり言えなかった。
- ⑥読後レポートについて(0か5か10) ----- ( 5.5 /10)  
10：真剣にレポートに取り組み、満足のいくレポートが書けた。  
5：真剣に取り組んだが、時間的な制約もあり、並のレポートに終わった。  
0：あまりまじめに書かず、形だけのレポートだった。
- ⑦合計点の計算：① + ② + ③ + ④ + ⑤ + ⑥ = 【 91.0 /110】

2. 授業に対する感想・要望・批判などを書いて下さい。【採点対象外】(主な記載例：順不同)
- ・先生によっていろいろな話をしてもらえてよかったです。
  - ・それぞれの先生特有の話を聞いて、先生本人のこともよく分かってよかったです。
  - ・ディベートをやったのは大学に入って初めてだったので、戸惑いもあったのですが、けっこう楽しくできてよかったです。
  - ・ほとんどの先生のお話が楽しかった。興味のある内容でおもしろかったのもあったし、雑談でおもしろかったのもあった。来年が楽しみだ。
  - ・先生がじかに来て、いろいろと話をしてくれて、なごんだ雰囲気の中、楽しんで授業をうけることができた。特に興味があるのは先生の大学生時代の経験で、心理の勉強につながった日常生活について教えてほしかったです。
  - ・本格的なディベートは初めてでした。とても楽しかったです。いろいろな内容について深く考えることができました。授業中に飲食OKなのが新鮮でした。
  - ・一番楽しい授業だった。本をいっぱい読めた。けっこうおもしろい本もあってよかった。個性的な先生が多くて面食らった。
  - ・先生によってディベートのやり方が違っていたので、少しとまどいました。できれば統一してほしいかったです。